

[10] エネルギー史研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/13828>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 10, 1979-03-03. 九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：



改題の辞

『エネルギー史研究ノート』は昭和四八年五月発刊され、以来九冊を刊行して、今回はNo.10にあたるが、No.10を機会に題名を『エネルギー史研究ノート』から『エネルギー史研究——石炭を中心として——』に改めることとなった。

もともと『エネルギー史研究ノート』は『筑豊石炭礦業史年表』編集の最終段階において、それまでの烈しい熱意と懸命の努力にもかかわらず、なお典拠の薄弱、資料の脆弱等々の限界と欠陥はおおいがたいものがあり、情熱のみでは如何ともなし難いものがあることを悩みに悩んで、石炭礦業史を基礎の基礎から再び学び直すことを目的として編集をはじめたものであった。

ふりかえると『筑豊石炭礦業史年表』の編集は、これに結集した人のすさまじい熱気と献身的な努力によって成し遂げられたものであったが、編集委員一同が余りにも心情的であったことは長所であると同時に、欠点でもあったように思われる。心情的であったからこそ、きわめて劣悪な条件の中で、みんなが耐え得たし、同志的共感があつたからこそ、素手で膨大な資料に取り組み、塹壕戦のような作業にも耐え得たのであったが、しかし他面では学問的に冷酷なまでつきつめるきびしさを欠いていたように思う。そのころ恩師宮本又次先生が「ハートは燃えていなければならぬが、頭はクリアでなければならぬ」と云われた言葉を幾度想い出したことであろうか。編集委員一同は燃えて身を挺していそしんだ。そのことは実に快い想い出であり、あの烈しさこそ筑豊の気質であり、九州男児の本領と思うけれども、同時に私たちは、もっととねばり強く、もっと冷静に、もっとゆとりをもって、事実をつきつめる必要を痛感したのであった。『エ

ネルギー史研究ノート』の創刊の辞には、「学問は激流岩を噛む烈しさも時には必要であるが、本筋には、動くとも見えぬ洋々平たる大河の流れの如きおらかさと持久力が大切なのではあるまいか」と書いているが、まさに大河の流れの如き底力のある研究のあり方を、その時点で私達は今後の理想とし、その修煉につとめようと思ったのである。しかしながら、もちろん一挙に大河たり得ない。「小事に忠なる者は大事にも忠なり」という如く、現実には小さな事実の一つずつを積み上げて、「愚公山を移す」ことに着手したのが『エネルギー史研究ノート』であり、『九州石炭礦業史資料目録』、『明治前期肥前石炭礦業史料集』であった。此の間、共にはかり、共に学んできた友人たちの学問を通しての、さらにより深い人間としての友情に心から感謝したいと思う。

こうして小論文や資料紹介、報告や随想等、文字通り「研究ノート」として出発したのであるが、幸に若手研究者、民間研究者の参加により、少しずつ発展を続け、最近はいわゆる「ノート」には惜しいほどの力作の論文も載せ得るようになってきた。私としては一度選んだ題名はそう簡単に変えるべきではないと思うし、何よりも当初の発想の記念でもあるので改めたくない気持も強いが、しかし世の中では名は実をあらわすことも大切であり、何よりも「研究ノート」という題名のために片々たるパンフレットと思われる向も多く、発行部数の少ないのとも相まって研究者や研究機関に未だ余り知られていない状況で、折角力作を寄せて下さった方々に気の毒な想いもしており、また、読まれる機会が少ないために、いつまでも同志感のみに支えられ、グループの親しさに押れ合うのも問題で、もっと外部からのきびしい批判

を受けることも大切であると思うので、むしろ此の際題名から「ノート」をとり、『エネルギー史研究』という題名とし、副題に「石炭を中心として」を加えて、新しく世に出そうと思うのである。

このことは決して従来寄せていただいた小論文、資料紹介、報告、随想等を締め出す気持は毛頭なく、何も専門誌を気どる気もない。むしろ小さな事実への愛や、素朴な感想、逞しい野性は決して喪つてはならないと思う。ただ、さしあたり二、三篇必ず力作の論文を載せることとして、とくに若手研究者の励みともなれば幸なことではないだろうか。また「石炭を中心として」という副題は、最初の計画では「石炭（又は石炭産業）史ノート」であったのが、石炭を知るためには、視野を他のエネルギーにも拡げておくのがよいという発想から「エネルギー史」とつけられたもので、「石炭を中心として」を副題としても、従来通り石炭以外のエネルギー史の研究を排除するものではない。今後も『エネルギー史研究ノート』の精神を生かして、どんな小さな事実でも大事に書きとめておき、素顔のまま素直な気持で、一つ一つの事実をみんなの広場に持ち出してゆきたいものである。したがって『エネルギー史研究ノート』の直接の継承の意味もあり、号数はノートからそのまま続けて今回はNo.10ということにしたい。

しかも今回、長年念願していた石炭研究資料センターが、昭和五十四年度より九州大学に設置されるようになったことは、まことに喜ばしいことである。これによって、今後石炭に関する史料の整備、保管、情報の蒐集、研究の推進、研究者の結集に最小限の手がかりが出来たと云えるであろう。思えば十年以前から今日に向けて結集した人々の力はまことに烈しいものであった。昭和四三〜四八年の『筑豊石炭産業史年表』の編集、刊行をはじめとして、昭和四三年秋以降の佐賀県多久地方を中心とする石炭用具の蒐集、保存、文書の整理、あるいは昭和四八年以降の『エネルギー史研究ノート』（No.1〜9）、昭和

五〇年以降の『九州石炭産業史資料目録』第一〜五集の編集、刊行、また昭和五二年『近代経済の歴史的基盤』（第Ⅴ編「石炭産業の発展とその周辺」ミネルヴァ書房）、『明治前期肥前石炭産業史料集』（文献出版）の刊行、そして同年五月九州大学において社会経済史学会が開催され、石炭を中心として「エネルギーと経済発展」の共通論題を掲げて、報告・討論がなされるなど、これらに結集した各地の研究者のエネルギーは石炭研究資料センター設置のために実に大きな学問的推進力となった。

それだけに、このセンターは九州大学のためのものであってはなるまい。学界、民間を問わず全国の石炭産業史の研究者と石炭に関連する広汎な諸領域の研究者のために充分役立つセンターとして育ててゆかねばならない。たんなる研究センターではなく、研究資料センターであることを銘記しておくべきである。それは、センター専任、兼任の研究者のためだけではなく、全国の学界、民間の研究者に対し、資料、文献、情報を蒐集、提供できるよう、またそのためにも常に研究を推進して多くの要望に応じ得るものとして、みんな育ててゆかねばならない。かつて、こうした施設の設置の際には、ともすればサタンが跳梁し、個人や部局、派閥の欲望のために本来の目的がねじまげられ、設置の理想が踏みにじられ、やがて時を経て、それ自体も研究者からうとんじられ、地域から見捨てられるのを私は余りにも見てきたように思う。今度はそういうことは絶対にあってはならないと思う。たとえ、かつての石炭の専門研究者であっても、石炭産業の崩壊過程で、いはやく「転進」してしまい、資料の保存にも石炭産業の学問の後始末にもあたらなかった人は全く頼りにならない。むしろ石炭産業の崩壊過程の中で、石炭に静かな熱い炎をもちやして、黙々と資料と取りくんだ人達を、私はほんとうに尊いと思っている。センターはささやかながらも、そうした人達によって支えられ、あくまで各学問分

野の広場として、本来の意味での石炭研究資料のセンターとして、設置の目的に添ったものとしなければならない。そうすることがセンターの将来の発展のためであり、全国的にも、また国際的にも意義ある存在となるであろう。

昨年の夏には以前九州大学に留学していたレギネ・マチアスルパワ夫人（現ボン大学講師）が再び日本に来て福岡にも寄り、長崎県の炭坑にもぐる程の熱心さであった。彼女は留学中の成果をまとめ、ウィーン大学で学位を得たが、学位論文 *Industrialisierung und Lohnarbeit der Kohlebergbau in Nord-Kyushu und sein Einfluss auf die Herausbildung einer Lohnarbeiterschicht, Wien, 1978*

は昨年の捻りの一つであろう。逆に我々も今後日本の石炭産業史を国際的視野で見直し、国際比較史的にも資料や研究成果をつきあわせて近代化、工業化、資本主義発達史、ひいてはエネルギー問題まで広い視野で考慮することが重要なのではあるまいか。さしあたっては東アジア地域で石炭を中心として近現代の政治、社会、経済を考え直してみる必要があると思う。石炭研究資料センターは、その意味でも本来の目的に添った成長を遂げるよう切に期待するものである。一昨年の社会経済史学会の共通論題報告をまとめた『エネルギーと経済発展』も近く刊行される。ここでは石炭がまさに近代そのもの、工業化の象徴であったことが明確にされている。日本の石炭産業は崩壊したけれども産炭地の天地、地の底には凄じいばかりの怨念が残っている。前向きに新しいものを追って、ただ馬車馬のように走るだけが文化ではない。きちんとした後始末をし、石炭の歴史的意義を跡づけて現代の魂鎮めをなしてゆくことも文化であることを知らねばならない。西ドイツの Bergbau - Museum Bochum はそれをよく物語っている。我々はそのためにも、資料の目録作業を続けて資料の保存を訴えてゆかねばならない。

昨秋、筑豊では、熱心な民間の人々によって筑豊炭鉱遺跡研究会が組織され、また田川市の石炭記念公園にも調査費がつき、佐賀県でも石炭資料館の建設がはかられるなど、ようやく九州でも石炭の巨大な足跡を保存し、歴史的意義を評価する気運が出てきている。学界、民間協力して、石炭の資料の保存と研究を推進してゆく最小限の手がかりは出来てきた。石炭資料の散逸は日々広まり、石炭に生きてきた古者たちもしだいに少なくなりつつある。今や、産炭地に放置された多数の遺構保存は現在の急務であろう。II International Congress on the Conservation of Industrial Monuments, Bochum, 1978

を見て、我々は産炭地の遺構保存、記録をもっと真剣に考えなければならぬと思わされるのである。かかる時期に、九州大学に石炭研究資料センターが設置されることは、とりもなおさず重要な使命が課せられているということにはほかならない。筑豊、三池、肥前、宇部の諸炭田とこれに密接に関連した地域を直接のフィールドとし、各地域に石炭と深くかかわった人々を抱え、理科系の石炭に関連した諸科学が伝統的に強力で資料も豊富な大学で、社会科学的に石炭と取り組むことが出来るのは、きわめて恵まれた研究条件と云わねばならない。センターがいかに進むかは今後の課題であり、センターとして何らかの紀要や雑誌等が刊行されるようになれば、わが『エネルギー史研究』としても再度考慮しなければならぬかも知れないが、いずれにしろ側面からセンターを支えるものがありたいと心から願うものである。

此の一年間、「エネルギー史研究ノート」は開店休業状態であった。もしも、すでに伸びる生命力を喪っているのなら、いたずらに形骸を守ることはしたくない。いさぎよく廃刊するなり、また別に刊行している『西南地域史研究』に吸収してしまうことも考えられぬではなかった。しかし私には、まだエネルギー史研究会は決して生命力を喪

っているとは思えない。むしろ発展のための一休みであったと思いたい。そしてセンターの設置とともに、もっと発展的に考うべき時が来ているのではないだろうか。今度の『エネルギー史研究』への改題も、発展への一つの試みであろう。この判断が良いか、否か。今後の研究活動、発表の如何によるが、どうか学界、民間の各位が、石炭へ燃やす情熱と同様に、此の雑誌をも暖かく見守り、育んで下さるよう切にお願いするものである。とくに石炭産業史を生涯のテーマとしている若い研究者たちの奮起を期待したいと思う。前途の予測はつきかねるが、課せられた使命を信じ得る限りは、たえず努力を続けたいと思う。

これまで此の地味な雑誌を刊行して下さった西日本文化協会（会長永倉三郎氏、専務理事村上義一氏）に対してはただ感謝のほかなく、今後も引き続き刊行して下さいよう切にお願いしたいと思う。

今後とも各位の御理解と御助言を切にお願いする。

昭和五四年二月二三日

秀村 選三